

「侯爵夫人」になる方法

— 『骨董屋』 にみる看護とヒロイン造型

西垣 佐理

1. はじめに

ヴィクトリア朝時代において病・医療・看護に関する言説は、サー・エドウィン・チャドウィック (Sir Edwin Chadwick, 1800-90) の公衆衛生改革やフローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) らによる看護師改革によって社会の注目を集めるに至った。これらのテーマは文学においても頻繁に登場し、物語展開に大きな影響を与える。チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) も、こうした主題をいち早く作品に取り入れ、社会の実情を小説世界に反映させた作家の一人である。彼の前期作品の一つ『骨董屋』 (*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) においても、病や看護の場面が登場し、物語展開において大きな役割を果たしている。

患者に対して看護人¹の役目を果たすのはヒロインであることが多いが、『骨董屋』には二人のヒロインによる二つのプロットが存在するため、興味深い対比の構図が見られる。第1に物語本来のヒロインであるリトル・ネル (Little Nell) とその祖父トレント老人 (Old Mr. Trent) が中心となる物語。第2に放蕩紳士ディック・スウィヴェラー (Dick Swiveller) と「侯爵夫人」 (“The Marchioness”) とあだ名される名もなき小間使いが中心となる物語である。二人のヒロインは、各プロット上でそれぞれ看護行為に従事するが、看護の場面以降の物語展開および結末には大きな違いが見られる。ネルの献身的な看護は報われることがなく、貧困と逃亡の果てに幼くして過労で亡くなるという悲劇的な結末を迎える。他方、「侯爵夫人」が行う看護はヴィクトリア朝文学におけるヒロインの看護の典型となり、看護行為によって彼女自身のアイデンティティが確立すると同時に、患者であるディックとの結婚によって彼女の地位が向上するという結末になっている。看護行為の見返りという点で二人のヒロインの命運は大きく分かれるのであり、物語展開において看護の場面が重要な転機となっているのだ。また、『骨董屋』という作品がナイティンゲール登場の10年以上前に書かれた点を鑑みると、看護行為によって端役が新たなヒロインになり得る事例をディケンズが既に描いていたところに、この作品の時代的な先駆性を指摘することができよう。さらに、ディケンズ文学におけるヒロイン造型についてはこれまで多くの論考があるものの、看護行為と物語展開およびヒロイン造型との関係につ

いての研究はほとんどない。そのため、作品の新たな「読み」の提示を試みるという点で一考の価値があると思われる。

そこで本論では、物語の構成要素となった看護行為の歴史的背景を概観し、続いて『骨董屋』に登場する二人のヒロインによる看護の事例を取り上げ、「看護人－患者」の関係を踏まえて、作中における看護行為とヒロイン造型について考察したい。

II. ナイティンゲール登場以前の看護事情とヴィクトリアン・ヒロインの本質

まず、『骨董屋』における看護行為とヒロインの関係を考察する前提として、19世紀前半における看護職と看護行為の意義およびヴィクトリア朝の理想的な女性像について簡単に見ておくことにする。

19世紀半ばから後半にかけて、看護師という職業はナイティンゲールらの尽力によって、とりわけ中産階級の女性たちにとってガヴァネスと呼ばれる家庭教師 (governess) と並ぶ「リスペクタブル」 (“respectable”) な専門職となった。しかし、ナイティンゲール登場以前の時代では、プロフェッショナルの看護職は労働者階級の中年女性たちが主に行う卑しい仕事であると見なされていた。というのも、看護には「患者の身体に触れる」という行為を伴うので、家族以外の人間、特に女性がそれを行うのは倫理的に厳しいという側面があったからである。看護行為が元々母から娘へと受け継がれる家事労働だという認識があったこともあり、ガヴァネスと同様に母親がする仕事に似ているという理由でリスペクタブルな仕事と考えられた。そして女性の人口過剰が問題になった19世紀において中産階級の結婚できない女性が外に出ても社会的に体面を保つことができる職業として次第に認められていった。もっとも、プロとしての地位は中々向上しなかったのであるが。²

ただ、ヴィクトリア朝時代に入り中産階級が台頭してくるにつれ、家父長制度形成およびその維持のために、女性たちが理想的な女性性を獲得することが求められた。当時の中産階級の女性たちが持つべき資質として、「美德」 (“virtue”) や「義務」 (“duty”) そして「道徳的感化力」 (“moral influence”) があげられる。これらの資質を獲得することが、彼女たちが「リスペクタビリティ」を持った中産階級の女性として認知されるために必要だった。「リスペクタビリティ」とは、サリー・ミッチェル (Sally Mitchell) が述べるように「絶対的な定義はない」ものの、「自立という概念と密接に結びついている」 (Mitchell 262)。それは経済面と精神面の両面において求められたもので、特に経済面では経済的に自立し、儉約を旨とすること、精神面では真面目で慎ましかで、正直であることが好ましいとされた。そして、これらはそれぞれ男女の性的役割分業とも結びつき、男性が経済面を、女性が精神面を担うように求められた。

ゆえに女性の精神面のリスペクタビリティを強調することで、単なる家事労働だった看

護行為もそうした中産階級の価値観を意識したものへと変容していったのである。看護行為によって、女性たちは本来持っている「母性」のみならず、美德・義務・道徳的感化力・リスペクタビリティを伴った女性性を発揮できることとなったのである。それゆえに、ヒロインに模範的人物たることを求めた文学において、看護行為がとりわけ顕著に見られるようになったのである。

さらに、1830年代から40年代にかけてチフスやコレラといった伝染病がたびたび流行したことも、看護や公衆衛生に対する認識を変える一助となった。こういった事情により、文学において病・公衆衛生・医療・看護というテーマは、当時極めて新しくホットな話題だったのである。

では、ディケンズはそうした時代的主題を『骨董屋』においてどのように取り扱い、ネルと「侯爵夫人」という二人のヒロインの人物造型および物語展開との関わりにおいて、どのように描いているのだろうか。

III. 『骨董屋』にみる二つの看護とヒロイン造型

1. 「大人」と「子供」の逆転：ネルの挑戦

作品本来のヒロインであるリトル・ネルは14歳の思春期の「少女」として登場し、最初から最後まで純粹で無垢な「子ども」として扱われる。ネルの人物造型のモデルとなった実在の人物が若くして亡くなっていることから、『骨董屋』のヒロインもまた大人になれない呪いを背負うことになった。ネルのモデルは、作者ディケンズの義妹メアリー・ホガース (Mary Hogarth) であり、彼女は1837年5月に17歳の若さで急死したのである。伝記作家のジョン・フォースター (John Forster) によると、ディケンズはメアリーの思い出について次のように語ったという。「愛しいメアリーが昨日亡くなったとき、私はこの悲しい物語を思いついたのだ」(Forster 122) と。メアリーの死のショックのあまりディケンズは落涙せずにネルを描くことはできなかったという。こうしてリトル・ネルは、大人になれない永遠の子どもとして造型された。

ネルが子どもであるならば、大人たちには彼女を保護し、援助を与える義務があろう。ところが、作中においてほとんどの大人たちは彼女を子どもとして庇護しようとしなない。ネルの家柄を鑑みれば、祖父であるトレント老人が言うように、彼女は将来貴婦人になる子どもとして大切に扱われるはずであった。だが実際には、周囲の大人は誰も彼女を助けようとせず、彼女は厳しい現実を経験することになる。彼女の悲劇は、子どもなのに子どもとして正当に扱われないところにその原因があるといえよう。

周囲の大人はネルを子ども＝保護対象と見なさず、さりとして一人前の女性扱いするでもなく、そのくせネルの「美しさ」ゆえに、彼女に女性性やセクシュアリティを見出す。ト

レント老人の債権者であり、ネルを執拗に追い回すダニエル・クウィルプ (Daniel Quilp) は、以下のように繰り返しネルの「美しさ」を強調している。

“She has a pretty face, has she not?”

“Why, certainly,” replied Dick, “I must say for her that there’s not any very strong family likeness between her and you.”

“Has she a pretty face?” repeated his friend [Quilp] impatiently.

“Yes,” said Dick, “she has a pretty face, a very pretty face. What of that?” (61)

さらにクウィルプが、「とても瑞々しく、若い盛りの、慎ましやかでかわいい蕾だね。(中略) まったく、ぼっちゃりして、薔薇のような、心地よい、かわいいネル！」(80) とトレント老人に語っているように、ネルは「子ども」としていわば半人前の扱いをされながらもその美しさが強調されており、保護の必要な子どもでも一人前の女性でもないのにセクシュアリティを備えた存在とされている。つまり、責任も敬意も伴わない純粋な欲望の対象と見なされているのだ。それゆえ、ネルの「美しさ」は、彼女の受難の原因にしかなりえないのである。

ネルのような純粋さと「美しさ」を備えたヒロインには、往々にしてふさわしい未来の夫候補が作中に用意されているものだが、彼女にはそのような相手は現れなかった。可能性としては、トレント家に仕えていた善良な少年キット・ナブルズ (Kit Nubbles) がネルに最もふさわしい求婚者となり得たかもしれない。だが、彼は物語の最後でバーバラ (Barbara) と結婚し、次のように告白する。彼はネルのことを「まるで天使のような人」(519) と見ており、愛する対象ではなかったというのである。

さらに、『骨董屋』の第1章、ネルが寝床に横たわる場面が象徴的に表すように、彼女は物語の最初から死を運命づけられており、作品を通して非現実的な人物として描かれている。例えば、ネルは「ある種の寓意物語」あるいは「(グロテスクな) 群れの中の唯一純粋で新鮮で若々しい存在」(22) であると語られ、加えて彼女は「癒しの天使」ではなく「死神に愛された天使」として描かれる。それに関してはサンドラ・M・ギルバートとスーザン・グーバー (Sandra M. Gilbert and Susan Gubar) が「ディケンズのリトル・ネルのような死の天使という19世紀の崇拜の対象は、文字通り「死を親しみやすいものにする」という結果になり、死にゆく女性や子供たちについての習慣化された図像学や形式化された聖人伝を生み出した」(Gilbert and Gubar 24-25) と説明するとおりである。

このように、夭折したメアリーをモデルとするリトル・ネルは、子どもとして正当に扱われない子どもであり、「美しさ」ゆえに欲望の対象とされるが求婚の対象とはならない

存在であり、非現実的な天使のような人物、すなわち成人女性になれない永遠の子どもとして造型されている。それゆえ、ネルの看護行為がリスpekタブルな一人前の女性としての成熟につながることはありえないが、看護を意味する“nursing”という言葉が元々「母性」を意味していたことから明らかなように、看護行為と女性としての成熟は不可分のものである。その意味において、ネルは最初から看護行為による救済の失敗を宿命づけられた存在なのである。

では、そのように失敗すべく定められたネルの看護は、作中で一体どのように描かれているのだろうか。破産して精神錯乱に陥った祖父をリトル・ネルが看病するくだりでは、以下のように彼女の孤独感が強調されている。

Yet in all the hurry and crowding of such a time, the child [Nell] was more alone than she had ever been before; alone in spirit, alone in her devotion to him who was wasting away upon his burning bed, alone in her unfeigned sorrow, and her unpurchased sympathy. Day after day and night after night, found her still by the pillow of the unconscious sufferer, still anticipating his every want, and still listening to those repetitions of her name and those anxieties and cares for her, which were ever uppermost among his feverish wanderings. (90)

ここに描かれる看護行為は抽象的かつ精神的な次元に留まり、具体性や現実性を欠いている。ネルによる看護は現実的行為というより、むしろ精神的な自己犠牲であり献身なのである。トレント老人が語り手のハンフリー老人に説明するところによれば、ネルこそが大人でありトレント老人のほうが子どもであるという。

“Sir,” rejoined the old man after a moment’s silence, “I have not right to feel hurt at what you say. It is true that in many respects I am the child, and she the grown person—that you have seen already. But waking or sleeping, by night or day, in sickness or health, she is the one object of my care, and if you knew of how much care, you would look on me with different eyes, you would indeed. [. . .]” (16)

大人と子どもの役割が逆転した結果、トレント老人はネルに対していかなる責任も持とうとせず、それゆえ仕方なくネルが「大人」の役目を果たして老人を精神的に回復させようと試みるのである。ネルの看護とは彼女の自己犠牲を象徴的に表す行為であり、それゆえ作中でも具体的に描かれることがないのである。

ネルとトレント老人は破産した後、債権人のクウィルプから逃れるために旅に出るが、その旅の始まりにおいて、ネルは以下のように自分が祖父の「案内人」かつ「指導者」であることが自分の義務だと意識している。

“Which way?” said the child.

The old man looked irresolutely and helplessly, first at her, then to the right and left, then, at her again, and shook his head. It was plain that she was thenceforth his guide and leader. The child felt it, but had no doubts or misgiving, and putting her hand in his, led him gently away. (102-3)

さらに、ネルは旅路で挫けそうになるたび、以下のように不屈の精神をもって復活することを余儀なくされる。

In one so young, and so unused to the scenes in which she had lately moved, this sinking of the spirit was not surprising. But, Nature often enshrines gallant and noble hearts in weak bosoms—oftenest, God bless her, in female breasts—and when the child, casting her tearful eyes upon the old man, remembered how weak he was, and how destitute and helpless he would be if she failed him, her heart swelled within her, and animated her with new strength and fortitude. (185)

彼女は苦難の中でもとりわけ経済的困窮に耐えねばならなかった。というのも、トレント老人が簡単に賭博の魅力に屈してしまうからである。賭博で金を失う毎に、彼は孫娘にさらなる金銭を要求し、最終的にはネルが大事に隠し持っていたなげなしの金銭までネルの睡眠中に奪い取るのだ。あげくの果てには賭博師たちにのせられ、世話になっていた移動蠟人形館「パンチ・アンド・ジュディー座」の女主人、ジャーリー夫人 (Mrs. Jarley) から金を盗もうとさえする。ただし、ネルが偶然その話を聞いていたために、恩人であるジャーリー夫人のところから出て行くことで老人を犯罪から引き離すのに成功する。この点では、ネルは道徳的改革者として一定の役割を果たしたとは言えようが、老人の精神的回復という観点では問題解決に至っていない。

その後、旅路の初期に出会った貧乏教師 (The Poor Schoolmaster) と再会し、彼の庇護の元におかれたことで、ネルとトレント老人はようやく最悪の状態を脱するに至る。それによってトレント老人の精神錯乱は小康状態を得ることになるが、ネルの方はそれまで

の疲労がたたり、病の床につく。老人はネルが病に冒されて初めて改悛の情を垣間見せるようになるものの、結局ネルを救うことはできず、彼女は力尽きて息を引き取り、トレント老人も後を追うように亡くなる。結局、トレント老人は貧乏教師の援助によって安住を得るまでネルの献身と看護に応えることはなく、精神的・経済的に依存するばかりで、最後まで真の改心に至ることはなかったのである。

興味深いのは、トレント老人が自分の経済的苦境を救うことのできる唯一の人物——トレント老人の弟で、金持ちとなった「独身男」(The Single Gentleman)——の存在に最後まで気づけなかった点である。この「独身男」がネルとトレント老人の居場所を見つけたのは、時遅くネルが亡くなった後であった。結局、老人が求めていたのは男性登場人物による経済的援助ではなく、幼い娘による精神的援助という名の自己犠牲にすぎなかったのであり、それゆえ老人に対するネルの看護も献身も、すべては無駄に終わるのである。

2. 有能さと抜け目なさ：「侯爵夫人」による看護

次に、もう一人のヒロイン、「侯爵夫人」の人物造型と看護場面について検討していく。「侯爵夫人」とはいかなる人物であるのか、ディックが端的に説明している箇所を見てみよう。

“This Marchioness,” said Mr. Swiveller, folding his arms, “is a very extraordinary person—surrounded by mysteries, ignorant of the taste of beer, unacquainted with her own name (which is less remarkable), and taking a limited view of society through the keyholes of doors—can these things be her destiny, or has some unknown person started an opposition to the decrees of fate? It is a most inscrutable and unmitigated staggerer!” (434)

ここで「侯爵夫人」は世間的に無知であることが強調されており、彼女を取り巻く世界がいかに狭いものであるかが分かる。「侯爵夫人」は雇い主であるブラス家の女主人サリー・ブラス (Sally Brass) からろくに食物も与えられず、折檻され殴られるなど、極めて厳しい扱いを受けている。ディックはこうした状況を知り、彼女に夕食を食べさせ、トランプの賭博ゲームを教え、「侯爵夫人」というあだ名を与えるなど、彼女に友好的な態度を取る。それによって二人の間にある種の友情関係が成立するのだ。

ディックの病と「侯爵夫人」による看護の場面は、二人のこうした友好関係を強化することにつながる。ディックが熱病にかかったのは、彼が無実の罪を着せられたキット・ナブルズの件で奔走し、結果として雇用主であるサムソン・ブラス (Sampson Brass) か

ら法律事務所の仕事を解雇された直後である。ディケンズ作品において男性登場人物が病にかかるのはアイデンティティ確立の失敗や経済的不調が原因であることが多いが、『骨董屋』のディックの場合もこの例に洩れない。³ ディックが病に倒れたことを鍵穴から聞きつけた「侯爵夫人」は、ブラス家を飛び出して彼の下宿に「妹」と称して入り込み、彼を看護することになる。看護者としての彼女の有能さは、病室の説明において既に見て取ることができる。

The same room certainly, and still by candle-light; but with what unbounded astonishment did he see all those bottles, and basins, and articles of linen airing by the fire, and such-like furniture of a sick chamber—all very clean and neat, but all quite different from anything he had left there, when he went to bed! The atmosphere, too, filled with a cool smell of herbs and vinegar; the floor newly sprinkled; the—the what? The Marchioness? (476)

「侯爵夫人」の整えた病室は、彼女自身が看護師としての訓練を受けたことが全くないにもかかわらず、とても清潔できちんとしており、当時の理想的病室を反映していると考えられる。とりわけ、“clean”と“neat”という言葉は、当時の看護書によく見られた記述を活かしていると思われる。⁴ さらに、彼女の看護の様子は以下のように描かれる。

She propped him up with pillows, if not as skilfully as if she had been a professional nurse all her life, at least as tenderly; and looked on with unutterable satisfaction while the patient— [...] . (478)

専門職と比較して同程度の技術があるわけではないが、それでも彼女は患者を優しく扱っている。この引用以降、「侯爵夫人」が「ナース」という言葉でも呼ばれていることも見逃せない点である。マイケル・スレイター (Michael Slater) が「女性は子供たちにとって生まれながらの教師であると同様、生まれながらの看護人であると考えられ、(中略)ディケンズはしばしばこの信条を自分の作品、特に「侯爵夫人」がディック・スウィヴェラーを看護する際に表現した。」(Slater 313) と述べるとおり、女性登場人物は元々看護人としての素養を持ち合わせているが、とりわけ無知な子どもである「侯爵夫人」がその能力を見事に発揮するのだ。彼女は看護人として十分な働きができるよう、抜け目なく「ディックの妹」という立場を取るのである。それによって、彼女は看護行為の際に男性の身体に触れる正当な権利を得るに至った。彼女は、「あなた [ディック] のた

めに注文したものを手に入れるため」(483)、ディックから衣服を脱がせ、それを売ることさえしているのだ。さらに、「侯爵夫人」は、小さなテーブルをディックのベッドサイドに持ち込んでそこに陣取り、医者の方通行りに熱冷ましの水薬を混ぜるのだが、それは「20人の薬剤師のような手際よくやってのけている」のである(479-80)。

こうした一連の行為により、ディックは「侯爵夫人」を有能な看護人であると認めることになる。

[...] and all this in as brisk and business-like a manner, as if he were a very little boy, and she [The Marchioness] his grown-up nurse. To these various attentions, Mr. Swiveller submitted in a kind of grateful astonishment beyond the reach of language. (490)

「侯爵夫人」は一人前の看護人であるかのようだと述べられ、彼女の有能さを目の当たりにして、ディックは言葉にならない感謝に満ちた驚きの念を持つのである。それに加え、「侯爵夫人」は物語全体を通して“sharp (-witted),” “quick,” “shrewdly,” “cunning”とといったように、「頭の回転の速さおよび抜け目なさ」を備えた人物として描かれ、彼女の看護行為もその性質によって特徴付けられている。一般に看護に求められる「母性」や「女性性」、そして「美德」の発露といったものは見られないが、看護能力の高さが強調されているのだ。

また、「侯爵夫人」は実際の看護行為のみならず「目撃者」としても活躍し、ディックの苦境を救う存在として提示される。彼女は看護に駆けつける前に鍵穴を通して自分の主人であるブラス兄妹がキットを無実の罪に陥れた事実を知り、そのことを看護の最中にディックに知らせる。そして、キットを救うために彼女が使いとなり、ブラス兄妹の捜索から逃れるために抜け目なく行動しながら問題解決への道を開くのである。

「侯爵夫人」の看護によって回復したディックは、それまでの放蕩な生き方を悔い改めることを決意する。自分の命を救ってくれた「侯爵夫人」に感謝し、彼女を虐待されていた生活から救い出し、以下のように、本物の「侯爵夫人」にはなれなくとも、少なくとも「いい服を着せて教育を受けさせたい」と考えるようになる。

“If you could make the Marchioness yonder, a Marchioness in real, sober earnest,” returned Dick, “I’d thank you to get it done off-hand. But as you can’t, as the question is not what you will do for me, but what you will do for somebody else who has a better claim upon you, pray, sir, let me know what you

intend doing.” (490)

こうしたディックの淡い希望は、彼の伯母が亡くなり遺産が手に入ることによって幸運にも叶うこととなる。彼の支援による教育の結果、「侯爵夫人」は賢く美しく明るい娘となり、最後に二人は結婚する。このように、病と看護を契機として、ディックの人生も「侯爵夫人」の人生も大きく変化したのである。

IV. 二人のヒロインによる看護と物語展開への影響

これまで、我々はネルと「侯爵夫人」の人物造型およびそれぞれの看護場面を見てきたが、改めてこれらの登場人物たちの行動の意義を分析していくことにしよう。二人のヒロインを比較すると、リトル・ネルと「侯爵夫人」にはいくつかの共通点が見られる。二人とも孤児であり、ほぼ同年齢で、患者の看病をすることで自分の義務を果たしている点である。ヒラリー・M・ショー (Hilary M. Schor) が指摘するように、「侯爵夫人」はネルをコミカルに、そしてロマンティックにしたキャラクターであり、二人に共通の特徴は、その(身体の)小ささ、機敏さ、そして忍耐強さにある (Schor 37)。

しかし、リトル・ネルの看護の結果は「侯爵夫人」の場合とは異なっている。ネルの看護は、「侯爵夫人」のように家庭の看護人として有能さを発揮しているというより、単に無垢な性格と天使のような善良さを示しているに過ぎない。キャサリン・ウォーターズ (Catherine Waters) が「リトル・ネルと彼女が表象する家庭的美德を神格化することにディッケンズが明らかに専念しているにも関わらず、彼のコミカルな想像力は、彼が別のやり方で伝える、理想像の感傷性と真面目さを転覆させている」(Waters 127) と主張するとおり、一見コミカルに描写された「侯爵夫人」のほうが、理想化し美化して描かれたネルの体現する感傷性や真面目さを圧倒しているのである。また、賭博との関わりという点で比較すると、ネルは祖父のギャンブル癖を止めさせようとしていたが、「侯爵夫人」はディックの看病中に教えてもらった賭博ゲームに夢中になって遊び続ける。ここにもまた、大人の世界を知らない「無垢な子供」であるネルと、世間知への適応性＝「抜け目なさ」を備えた「侯爵夫人」という人物造型の好対照を見て取ることができよう。⁵

ネルと「侯爵夫人」に対する物語上の扱いの違いは、彼女たちを描く時に用いられる呼称の違いにも表れている。ネルは物語全編を通してずっと「子ども」と呼ばれている事から明らかなように、大人になる可能性がほぼないことが示唆されている。一方、「侯爵夫人」の方は「小さな召使い」、「少女」、「ディックの看護人」といったように呼称が変化し、最後にはディックがかつて想いを寄せていた女性、ソフィ・ワックルズ (Sophy Wackles) にちなんだ「ソフロウニア・スフィンクス」(Sophronia Sphynx) という名前を

与えられ、この名で公的生活を送ることになる。ディックは彼女に名を与え、教育を受けさせ、最終的に結婚することになるが、結婚して妻となった後も彼女のことを「侯爵夫人」と呼び続けている。つまり、「侯爵夫人」という彼女のあだ名には、一人前の大人の女性に成長する可能性が示されていたと言えるであろう。

二人のヒロインによる看護の結果が異なるのは、彼女たちの人物造型の違いだけによるものではない。看護行為がヒロイン自身や物語展開にもたらす結果について考える場合、重要なのは患者が誰かという点である。「侯爵夫人」の患者であるディック・スウィヴェラーは偶然にも彼の叔母の遺産を受け継ぐことができたが、ネルの患者であるトレント老人には、ネルの存命中にそのような幸運が訪れることはなかった。さらに、ディックは若い紳士、かたやトレント氏は引退していてもおかしくない年齢で、もはや経済人として自立する力は持っていない。こうした患者の違いが、看護人である少女たちの運命を異なるものにしたといえる。

看護が患者に及ぼす効果という点で見ると、ネルはクウィルプによって「女性性」＝性的魅力を認められはするものの、大人の女性ではなく「子ども」に過ぎない。そのため、祖父をいかに献身的に看護しようと、母性を備えた女性としての感化力を発揮することはできず、彼を精神錯乱から回復させることはできなかった。対照的に、「侯爵夫人」は最初の登場時から性的魅力や女性性といったものを全く示さなかったにもかかわらず、その賢さと有能さ、および抜け目なさによって看護人として成功している。労働者階級の孤児だった「侯爵夫人」は、教育を受け、ディックの妻となったことで中産階級に属するようになり、ネルに代わって物語の理想的で幸福なヒロインとなったのである。

このように、『骨董屋』における二人のヒロインの運命は、看護をめぐるくっきりと明暗が分かれることになる。ネルは献身的な看護が報われぬまま不幸な死を迎え、「侯爵夫人」は看護の報いとして幸福な結婚をする。看護に従事した二人の運命を分かつ要因は何だったのだろうか。既に述べたとおり、家族に対する看護は女性の「義務」であり、極めて当然のことと考えられていた。したがって、患者が家族である限り、看護は物語展開の上で劇的な要素を持ち得ないのである。ネルの多大な献身にもかかわらず彼女の看護が報われることなく終わるのは、患者であるトレント老人がネルの身内であるがゆえに、彼女の看護行為を当然のことと受け止めているからだ。彼はネルの献身にすっかり慣れきってしまい、自分のせいで疲労困憊する彼女を気遣うそぶりさえ見せず、看護の価値に気づくことは決してない。確かに彼はネルなしでは生きていけないと周囲に公言するが、それは単に彼女の善良さにつけ込み、精神的にも経済的にも寄生し依存しているにすぎない。彼女に頼ることしかできないトレント老人が、ネルの後を追うように亡くなるのは必然であるといえよう。

それに対して、「侯爵夫人」の看護の対象はディックという友人であって身内ではないという点がネルの事例とは大きく異なる。他人に対する看護行為は、職業上の理由がない限り、恋愛感情や友愛の情、あるいは主従の絆といった特別な動機付けを伴う傾向にあるため、物語に劇的展開をもたらす要因となりやすい。「侯爵夫人」とディックは、他人を看護し他人に看護されることを通じて互いの関係を特別なものに変えたのであり、それが結果的には二人の運命の良き転機となったのである。

二人のヒロインは、自分の過去の生活から逃れ得たか否かという点においても、運命を分けるに至った大きな違いを見せている。ネルとトレント老人の物語は古いものに囲まれた骨董屋に始まり、旅路の終わりもまた古いものに囲まれた古びた教会だったことから、彼らは逃亡の旅の終わりまで「古い」環境を完全に脱することができなかった。そして、疲労の果てにネルは自分自身が患者となり、安住の地であっても回復することはなかったのである。一方、ディックと「侯爵夫人」の場合は、病と看護の場面を契機として彼らの環境は大きく変化する。ディックは病室で「侯爵夫人」と再会したときからそれまでの享乐的な性格を改め、堅実に彼女を助けようと心を入れ替え、「侯爵夫人」の方もディックの看護のためにブラス家の惨めで汚い地下貯蔵庫から逃げ出すのである。

V. まとめ

このように、『骨董屋』における看護は、ヒロインの人物造型およびその運命と大きく関わっており、それは後のディケンズ作品においても同様である。たとえば、リトル・ネルに見られる大人と子供の逆転と、「侯爵夫人」に見られる高い看護能力は、どちらも『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57)のヒロインであるエイミー・ドリット(Amy Dorrit)の人物造型に受け継がれている。ディケンズ作品における看護は、登場人物造型と物語展開の両方に関わるきわめて重要な要素なのである。

ディケンズは、文学における看護のテーマが大きな可能性を秘めていたことを早くから見抜いていたと考えられる。事実、イギリス社会において長らく卑しむべき職と見なされていた看護師は、1850年代のフローレンス・ナイティンゲールの活躍によって時代の最先端を行く女性の職業に変容したが、その10年以上前にディケンズは、「侯爵夫人」のような無学無名の周縁の人物が看護によってヒロインとなる可能性をいち早く示していた。彼は「白衣の天使」に先立って、美貌や家柄に恵まれない無学な少女でも、看護における有能さを発揮することで幸福を手にするヒロインとなれること、すなわち「侯爵夫人」になれるサクセス・ストーリーを描いてみせたのである。

注

1. 本論における「看護師（人）」（“nurse”）の定義及び呼称を簡単に押さえておく。*OED*によると、“nurse”とは、「(1) 赤ん坊に乳をやる女性（乳母）、(2) 他人の世話を行う人、(3) 病人の看護を行う人（一般に女性）＝看護師」とあって、看護をする主体は大抵女性である。一般に、(1)を“wet-nurse”、(2)・(3)を“dry-nurse”と呼ぶ。本論では、基本的に(2)・(3)を主に扱い、職業看護師を「看護師」、及び女性の義務として看護を行う人を「看護人」と区別して表記する。
2. ロバート・B・シューメーカー（Robert B. Shoemaker）によると、「妻や母親たちのように、女性たちは自分の家族に対して医療行為を提供するよう期待された。娘たちは母親から「医術」なるものを教わり、女性たちは家庭の主婦の手引き書を元にその技術を高めていった。」（Shoemaker 180）とある。詳しい解説は拙論『『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級』pp. 36-39を参照のこと。
3. デイケンズの男性患者と経済との関わりについては、拙稿「逆転の構図— *Great Expectations* における病と癒し—」や、「男が癒し手になるとき：『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相」に詳しい。また、病とアイデンティティの関係については、Miriam Bailin が次のように説明している。
In Dickens’s fiction, to be feverish is to be overwhelmed by a sickening convergence of identities, places, and stages of life, and to be tortured by the concomitant and compulsive need to keep separate, to detach, or to reconcile the press of images that become confounded each with the other. (Bailin 81)
4. ナイティンゲールは『看護覚書』(*Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not*, 1860)で、特に家の健全さのために必要な5つのポイントとして「1. 清浄な空気。2. 正常な水。3. 効果的な排水。4. 清潔さ。5. 光。」(Nightingale 24)とあげている。ただし、これらは『骨董屋』出版時より以前にチャドウィックが提唱した換気や清掃の提唱とほぼ同じであることから、『骨董屋』中でもこれに倣って看護の実践が行われていたのは明白である。
5. ヒロイン造型とギャンプルとの関連は、キャサリン・ウォーターズの“Gender, Family, and Domestic Ideology” p. 127に詳しい。

Works Cited

Bailin, Miriam. *The Sickroom in Victorian Fiction: The Art of Being Ill*. Cambridge:

Cambridge UP, 1994.

Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Oxford: Oxford UP, 1998. なお、本書からの引用ではすべて（ページ数）のみであらわす。

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 1871; London: Cecil Palmer, 1928.

Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. 2nd Ed. New Haven: Yale UP, 2000.

Mitchell, Sally. *The Daily Life in Victorian England*. Westport, CT: Greenwood Press, 1996.

Nightingale, Florence. *Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not*. 1860; New York: Dover Publications, 1969.

Schor, Hilary M. *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.

Shoemaker, Robert B. *Gender in English Society 1650-1850: The Emergence of Separate Spheres?* Harlow: Longman, 1998.

Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: J. M. Dent, 1983.

Waters, Catherine. "Gender, Family, and Domestic Ideology." Ed. John O. Jordan. *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 120-135.

西垣 佐理 「男が癒し手になるとき：『マーティン・チャズルウィット』にみる看護の諸相」『ディケンズ・フェロウシップ年報』第31号（2008年12月）3-15.

西垣 佐理 「逆転の構図—*Great Expectations*にみる病と癒し—」『関西学院大学英米文学』第44巻第1号（2000年2月）161-74.

西垣 佐理 「『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級」。『関西学院大学英米文学』第52巻（2008年3月）35-52.